

---

# アンチインスタンティズム

アルル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アンチインスタンティズム

### 【Nコード】

N7087I

### 【作者名】

アルル

### 【あらすじ】

文芸の腐敗、ライトノベルの台頭、想いの簡略化、それに絶えず苦悶する文学作家と、その友人、更に、ラノベ作家でもあるもう一人の友人が織りなすどこにでも在る物語。（今読むと誤字が酷いです。然し、其の恥を隠したくはないので敢えて修正はしません。悪しからず。）

## 菊月と僕（前書き）

初っ端から過激な書き出しになります。ご注意ください。

## 菊月と僕

狼は生きる！豚は死ぬ！

愚劣なる大衆には、冷たい雨を！烈しい風を！

日和見主義、御都合主義、オポチュニズムには破滅を！

単簡なる情緒、感情には、“平手の祝福”を！

免罪符、羊を得よう者には、同等の罰を！

神を頼り、仏を崇め、自身の責任から逃れよう者には、生き地獄たる社会に於いての永年なる生を！

影響力の功罪を問わぬ者には、因果応報を！

言葉の安売りをする愚鈍なる“子供達”には、苛烈なる結末を！

迎合を善しとする臃人おぼろひびには、幸いなる不幸を！

リアリストを称する者には、醒めぬ夢を！

遣りもせぬ、止めもせぬ者達には、残酷極まる現状の露呈を！

僕は、いや、俺は物書きだ。売れちゃいないが、物書きだ。そして、真のリアリストだ。

誰だ？こんな世界にしたのは。

リアル？笑わせるな。何を見てものを言ってる？

勉強はしたか？人としての在り方を。

伝えるべき事は何だ？読んでも見えやしないぜ？

行間はどうした？ いや、失敬。科白ばかりの物にそんなものは必要無いな。

句読点はどうだ？ 一体、其れを何だと思ってる？

考えるのは出世ばかりか？書き物の本質はそんなモンじゃないだろ。

言霊って言葉を知ってるか？本当に宿るんだぜ？もっとも、“ア

ヤカシ”を知らない者には理解出来ないかもな。

てにをはくらいは知ってるよな？でなきゃ話にもならない。

文学はどれほど研究した？答えは無いが、無い事もないぜ？導けるかどうかは手前次第だ。

これまでの事に疑問が有るなら、書くのは之までにしてくれ。はつきり言つて迷惑だ。

言論の自由？ハハハ、デカイ“メガホン”を持ってもまだそんな事言つてられるのかい？

たいしたもんだ。

言葉の暴力つてやつを知ってるか？考えた事があるか？其れが為に泣いてる連中を見た事あるのか？・・・ナメンナヨ？

文字にしたつて同じ事だろ。何だ、この社会は。誰だ、容認してるバカは。何の疑問も持たないのか。全体、何だ、金つてもんは。

愚民等が涎を垂らす程大好物の、“インスタントノベル”を書きやあ、そりや幾らか儲かるだろうな。けど、其れが何だ？自分等の子供達に読ませられるか？其れを以つて教育となるのか？答えは、考えるまでもないだろう。

あんた等、全体何が目的だ？金か？そりや先述の免罪符だろ。まさか、羊とは言つまい。

でなけりや、何だ。地位か、名誉か。そんなモンは一発家の専売特許だ。“今”つて時世ではな。

偽善者たるあんた等の言う処は、畢竟手前の存在を訴える手段だろう。

そんなモンの為に社会が歪んで良いと思つてるのか？ホントにそんな事を考える奴なんてのは、定めし救えない連中に相違無いぜ。

実際社会を見てみりや、一目瞭然か。俺もアホの一員で訳だ。

でもなあ、さつきから言ってる通りに泣いてる連中がいるつても事実なんだぜ？実際俺は毎晩泣いてる。涙の雨に降られて、着てる物が乾いたためしが無い。何時か、“服の色”が抜けちまうんじゃないかと不安でならない。

誰か、責任をとってくれよ。其れとも何か？神経衰弱は俺のせいだつてのか。もう充分だろう？いい加減、俺の神経も、蜘蛛の糸くらいになっちまったから、手繰り当てなきゃ掴めやしない。

批評家は何してる？何を見てものを言ってる？紙の束に目を通すだけなら誰だつて出来るだろう。其れとも何か？社会の言う処の価値にしか真を認むる事が無いのか。なれば、去れ！其処に居て良いのは、物を観察し、研究し、功罪を著す者だけだ。

ジャーナリストはどうした？ええ？“無冠の帝王”様よ。そう呼ばれたのは、今は昔か？まあ、其れでもいい。しかしなあ、其れを社会の規範とするのは解せねえな。模倣、出鱈目、思い付き、其れに妄想、比比ひひとして、然るに皆同様だ。あんた等にはもつと似合つた名があるぜ？“無感の帝王”だ。搾取した金は悪貨にして、社会の歪を大きくするのに大いに役立つてる。

歯車は最早プラスチックだ。善良なる人々の鋼製の其れとはもう噛合つちやいない。

近代作家もラノバイザーも一緒くたにしてゴミ箱行きだ！

そついや、近代アートも同じ事だな。ありやあ、何だ。聞く処に寄ると、感情や情緒を思いのままに現したモンだつて話だが、そりや本気で言つてんのか？だとすれば、笑えない冗談だな。散々金を注ぎ込んで、やつとの事で入った美大や芸大を出ておいて、遣つてる事はその辺の園児達と同じ事かよ。だつてそうだろ？情操にも発展せぬ心の、漠々たるイメージをただ模索して、畢竟それだけのモンを物的に現したに過ぎないんだからな。芸術の“げ”の字も籠もつちやいない。作為や悪意の無い園児達の創つた物の方が遙かに価値があるつてモンだ。近代アートをやりたきや、せめて、“ダリ”くらいのモンで済ましてくれ。

愚鈍な大衆が其の展示を見て廻つて、芸術だと称して賞賛する様は、正に“変人達のサロン”だ。俺には作つた奴も、其れを喜んで見てる奴等も、腐臭漂う屍か、魑魅魍魎と同じに見えるぜ。・・・勘弁してくれ。多くの偉大なる文学者達の殆どが自殺したくなる気

持ちが伝わるようだ。非情に苦く、呼吸の為に口を開こうにも、空気が既に腐ってやがる。

然しながら息が吸えなきゃ死んじまうんだから仕様が無い。全く以ってこの社会は歪よこしまんじまった。

生きている間、常に煩悶はんもんに絶えない。こんな俺の苦悩くなうに毫も気の付かぬ連中には心底辟易する

## 菊月と僕（後書き）

いきなり苛烈な書き出しで戸惑った方も居られるかもしれませんが、これは何も全てを否定しようという物ではありません。悪しからず、ご了承の程を。付き合っただけの方居られましたら、どうぞ宜しく願います。

## 菊月という男（前書き）

前回のサブタイトルがおかしかったので、内容自体とリンクしなかったと思います。ここから、本編に入る感じになります。どうぞ、宜しく願います。

## 菊月という男

久し振りに出会った友人、菊月きくつきまこと眞はそんな事を言っていた。ちなみに、菊月というのは本名ではない。彼が小説を書く折に使っている、所謂いわゆるペンネームだ。

其の彼が始終罵詈雑言に呈したのは、僕が飲ませた焼酎のせいだ。

すっかり酔いの回った彼は、いつまでも流動的な進展を、或いは、衰退を遂げる社会に対して、尋常ならざる不満を持っている様だ。そして不快に思っている様だ。

特に、頓に流行り出した単簡な芸術には多大なる不信感を以って評価している。現代の芸術は、画にしても、物にしても、造型にしても、全く非人情であると嘆いている。

概略ではあるが、ざっと挙げるとそんな処だ。

ちなみに僕は小説家でも芸術家でもない。其処そこいらを徘徊する営業的リーマンだ。名は、守田秀もりたしゅうという。勿論、之は本名である。彼とは大学時代からの付き合いだ。

或る時、退屈な講義をサボり、葉桜を背凭れにして、図書館で借りた文学小説に夢中になっていると、突然、降って来た。勿論、彼が、だ。

彼は、僕が来る前からずっと葉桜に攀じ登って空を眺めていたのだという。其処へ、僕が来たものだから、バレない様に暫くの間観察していると、読んでいる本が目に入り、其れに興味をそそられ、降って来たのだった。

流石に、天から人が降ろうとは予期せぬものだから、僕はかなり驚かされた。反面彼は至って冷静で、かつ、黙然としている。

僕が呆気に捕られていると、

「良い本を読んでるね」と、卒然として言った。

何の事やら訳が解からず、依然、呆けている僕に向かつて彼は、

「本だよ、本。君は良い趣味をしていると言ってるんだ」

「あ、ああ」狼狽しつつ応えると、

「さすがに、降って湧くのはまずかつたか」と悪びれる様子も無く、独り言の様に呟くと、僕の座る直ぐ傍に胡座をかき、男にしては可愛らしくもある、二重の、大きな瞳でじつくりと僕の顔を眺め回した。そうして、

「思った通りだ。君の顔には文芸の色が浮かんでいる」と、勝手に何かを悟って肯いている。

全体、彼は何なのだろう。

初対面の者に対して、こんな態度で、変人じみた所作を以って接するとは。まるで、どこぞの文学小説に登場するような人物である。それから、やっと、彼は自身の紹介をし、僕の名を聞いた。そして、此れからは非懇意になりたいと言ってきた。

変わり者である事は、木の上から当然に降ってきた処から、察するに難くない。然し、僕はそういつた処にこそ興味を引かれ、彼の申し出を受け入れたのだった。

彼とは学年も同じで、専攻科目もそれ程遠くない事もあって、それからというものの、僕等は暇さえあれば談義をし、大いに盛り上がり、互いの“自己”を高めあっていた。実際、彼の言う処の殆どに於いて、筋の通った優れたロジックばかりであったので、僕は実に有意義な意見を拝聴していた事になる。反対に、僕の言う処は、彼にとつては実に新鮮で、かつ斬新で、相槌を打ちながら、素晴らしい発想だ、とか、実に若く、其れでいて穿つ事の無い神聖なる境地だ、などと言って楽しんでた。

そうこうする内、互いに卒業という目的を果たし、僕は就職をし、彼は、既にバイト程度に始めていた物書きになった。彼は頻りに、

「君も作家に成るべきだ」と、薦めたが、僕は、

「自分には最たる文才など無いよ」と言っつて、其れぎりになつていたのであった。

ところへ、彼と偶然再会し、二人ともすっかり学生時代に戻ったよ  
うにはしゃぎ、僕のワンケーの、唯一の一室で焼酎の飲み比べをし、  
そして、現状に嘆きつつ帰って行ったのだった・・・。

## 菊月という男（後書き）

軽い内容で重い物を隠し伝える、というのが僕のスタンスです。どうでしょうか。ちょっと、ストレート過ぎるでしょうか。まだ、続きますのでどうぞ、宜しく願います。

菊月と僕と安田（前書き）

ついに、ラノベ作家が登場します。特に進展はしませんが、彼の言葉や守田との遣り取りを何となく楽しんで頂けたらと思います。

## 菊月と僕と安田

突然の、二人だけの淋しいクラス会を終え、ふと、僕は思考の水底へと沈んで行った。

(・・・彼は成長している)

久し振りに思い出した彼の学生時代からの主義主張は変わる処が無い。然し、かといって、全く変わっていない訳ではない。それは会話を通して伝わって来た事であるから、言葉では説明の仕様が無い。

(僕は、どうだろうか・・・)

考えるまでも無い。全く成長などしていない。之では、彼の言う処の愚民に成り下がっただけだと言えなくも無い。そう思うと、戦々恐々とする。自分は一体何の為に生きているのか。

彼の言う処は全く以って正しい。然し、其れは、現状を鑑みる上では、無理の有るロジックだ。ただ、其れが為に生きるのが人であると言われたならば、何の反論も出来ない。食う為には仕方無い事だと言えば其れまでだが、だとすれば、何時から人間はそんなにも偉くなったのか。メディアでは頻りにエコだ何だと騒ぎ、一部の工又ピーオーの連中等は集めた金を流用し、腹を太らせている。其れ以外の団体も同じ事だ。自分が正しいと思つた事を只単純に遣るだけで、其れは結局、一時の快樂を与えるだけで終わる。可哀想だと思つ人間達に“アメ”を配つて歩いていただけだ。“彼ら”からすれば之からはきつと幸せに成れると信じているのに、一粒ずつの、“傲慢な幸”を配るだけなのだ。

其れ以前に、人間とは何時から、そんな高尚なものに成りあがったのか？

自然を守る。管理する。種の保存を図る。ならば、淘汰という現象は何処へ行った？その結果滅びるモノが有ろうとも僕等には関係の無い話の筈だ。いや、完全には消えてはいない。

幕府が滅び、明治、大正が去り、昭和になつて酷い暮らしの中で文学が流行りだし、其れが今日にまで至る。其の間、其れは随分と大きく変化して来た。所謂彼の言う処の“インスタント”に。即ち、文学と呼ばれていた物は最早淘汰されたと言つても過言ではないのだ。

・・・エゴイストどもめ。

不意に気が付く。何故僕はこんな事を考えているのか。簡単な話だ。彼に刺激されたのだ。実際彼の言う処が正しいのだから、同意見の僕が社会を許す筈が無い。然し、僕は其の腐つた、彼の言う処の曲つてしまつた社会に生きる者の一員だ。なのに、こんな事を考えるなど・・・。

「正に“ロストマン”だな」思わず、そんな言葉が漏れる。と、ピリリ、と、ケイタイが鳴く。

(何だ)

ケイタイを手にし、液晶画面を見ると、思わぬ相手の名が浮んでいた。

世の中は何とも不思議なもので、ふとした偶然が、予期せず重なる事がよくあるものだ。

まあ、そんな事は気にせず、とりあえず着信を素直に受ける。

「もしもし、どうしたい」と、此方から先に受け、身構えると、

「いやあ、特にどうという事も無いんだけど」と、相手が応える。

「久し振りに連絡を遣しといて何にも無いなんて事はないだろう」

「まあね。実は、ちよつとした相談が有るんだけど」

「何だい。面倒事なら御免だぜ」と、予め楔を打ち込む。社会人としては、之が常套手段だ。

「実は、菊月の事なんだ」相手は語気を緩めつつ、素直に打ち明けた。

「・・・彼に何の用なんだ？」彼のこの発言には少々驚いた。実に以外だった。

「君、彼と懇意にしていたよな？」と、念を押すように訊いて来る。何故だろうと思つたが、一々嘘を付いても仕方が無い。

「ああ。さつきまで一緒だった」と、はつきり言つてやつた。

「はあ？さつきまで？」今度はあつちが驚いている。其れも其の筈、こんな偶然が重なる事など殆ど無いのが普通だ。然し、其れは先述の通り。

「ああ。さつきまで」驚く先方を無視して同じ事をまた言つてやつた。

「そうか。なら話が早いな」驚いたり、納得したり忙しい奴だ。

然し、何の事やら此方には一向に解からない。

「話が早いってのは何の事だい」と、確認する。

「実は、彼にも“軽い”小説を書かせようかと思つてね」何故か、彼は得意げにそう言つた……。

菊月と僕と安田（後書き）

読了感謝です。久し振りに読んでみると、如何にも昔の人間たちの会話の様に感じ、少々恥ずかしさを覚えました。皆様は如何でしょうか。といっても、読者は一人しか居ませんが……。まだ続きますので、何卒宜しくお願い致します。

## 安田という男（前書き）

今見てみるとかなり偏見に過ぎますが、現状を鑑みるとそうとも  
言えない現実が有ります。そこら辺を感じて頂ければと思います。

## 安田という男

ちなみに、彼の言う処の『彼にも』という科白には含みが有る。今話している“彼”というのは、菊月と同じ小説家なのだ。然し、物書きといつても、其処には地球と太陽程の、途方も無い距離が有る。其れはつまり、文学小説とライトノベル、という事だ。菊月は言うまでも無く文学小説を書き、同時に研究もしている。一方の、即ち今話している彼はライトノベルを淡々と書き続けている。時代の潮流からして、現状に於いて金の生るのは間違いなくラノベ書きだ。

余談ではあるが、彼と菊月とは大学時代からの因縁の仲だ。犬猿の仲と言つても良い。僕は其の当時から双方を知っていて、双方と付き合いが有る。とは言つても、菊月との付き合いの方に重きを置いていたが。ただ、同じ物書きという観点で以つて見ると、遙か遠く、其れこそ地平線の離れた距離から見れば、二人は其の目的こそ違えど、同一の人種であると言えなくも無い。

二人は大学に在籍中から共に物を書き、幾らかの収入を得ていた。僕にはそんなマネは出来ないので、最初は二人を羨ましく思ったものだが、実際に其の作品を読み比べ、其れに伴う対価を鑑みるに至つては、明らかなる不平等を感じたものだ。

評価があまりにも酷すぎる。殊に、僕等は間違つても大学生なのだから、お絵かきや、絵本を書くような立場には無い。というと、御幣が有るが、其れを売り物にしようというならば、其れなりに教訓たらしむる何かを、他人の情操に訴えかける何かを紡がなければ嘘だ。前述の通り、お絵かきにも、絵本にも、其の何たるかを考えさせる為の工夫が成されているのが本当だ。然し、菊月の物はともかく、彼、此処ではつきりとさせるが、安田光（勿論、之もペンネームだ）の其れは、間違う事無きおチャラケな、制約も規約も有つたものでは無い陳腐な出来であった。なれば必然、売れるのは菊月

の物の筈なのに、実際には安田の、よく解からない物であった。

魔法、SF、ファンタジー、何でも御座れだ。然も、其の制約は何ら規定されていない。序説で明らかとなるべきそれらは全くの無視だ。

そんなこんなで菊月と安田はよく喧嘩をしていた。勿論、殴り合いいではないが。

二人の過去を良く知る僕にとって、安田の提案は実にバカバカしく聞こえた。

「君も彼の性格は良く知ってるだろう。無理だね」そう突き放す様に言つた僕に対し、安田は相手を間違えているのも気にせず、「君は彼と懇意にしてるんだらう？ だったらそろそろ楽にして遣らうとは思わないのかい？」と、平然と言つてのけた。

彼に、菊月にとって、其れがどれほどの屈辱であるかも考えずにあまりの無神経に僕も気が立つて来て（菊月と飲んだ焼酎のせいもあるが）、言い返さずには居られなくなった。

「君らにとつてラノベがどれ程重要か知らないが、社会全体を見てみるよ。何も考えずに書いた物を読んで、何の重きも無い物を読んで育つていく子供達を見てみるよ。この先の社会は彼らが担い手になるんだぜ？ 情操はどうした？ 其の教育に、君らの書くラノベがどんな影響を与えるかという事を考えた事があるのか？ ゾツとしなせー！」

そんな強い語気で反論されるとは思つていなかったのだらう。彼は沈黙し、やがて、こう言つた。

「自分は自分の遣るべき事を遣るだけだ。ただ、現状として困窮しているであろう菊月を哀れだと言つんだ。彼は他にない文才を持っている。正に稀有だ。だから、其れを活かす事の出来る場所を教えて遣りたいんだ」

正直僕は糞喰らえと思つた。其れくらい菊月程に頭の切れる奴なら当の昔に解つてる。其れでも其れに依存しようとしなのは自身

の信念の為だ。安田は其れを理解していない。彼は恐らく多面的に物事を捉える事の出来ない人間なのだろう。菊月に比べ、何と小さな事か。彼こそ本当の哀れみに満ちている。然し、言っても解らない者には何を言っても無駄というものだ。付き合い切れなくなつたらとりあえず、

「・・・一応、伝えてはおく」くらいに言っておくのが妥当だ。

安田も其れで満足したらしく、

「宜しく頼む」と、簡潔に言つて電話を切つた。

思わず、（はあ）と溜め息を吐き、やっとの事で終わった無駄話を何処かへ押し遣り、僕は風呂へ向かい、シャワーを浴びただけで、後は、何をする気も起こらずに、早々に床に就いた・・・。

安田という男（後書き）

どうでしょうか？ 単なる“モノ”に依って構成されべき物など、  
社会の中に有ってはならないと僕は考えますが。 皆様は如何でしよ  
うか？

## 煩悶（前書き）

今回は次へ繋がる為の一節です。然し、守田秀という男の人間性が少しでも見えるかと思えます。

## 煩悶

「ははは！こりゃあ愉快だ」

僕の前に座る簾禿げの、でぶつちよのオジサンが、如何にも楽し  
いといった風に頬を緩めている。

「楽しんで頂けた様で、此方としても何よりです」

無理に作った営業用の笑顔で応対すると、

「いやいや、君は若いのに良く判ってる様だ」と、さも自分が偉  
い人物であるかの様な科白を吐いた。

「恐れ入ります」僕はそう言つてオジサンの目の前に置かれた菓  
子折りを不快な心持で眺めた。其れには菓子ではなく、上等な紙幣  
が大量に入っている。之は紛れも無い犯罪行為だ。然し、世の中は  
そんなにも美しくは無い。もとい、美しくは無くなつてしまつたの  
だ。こんな手を講じるのは癪に障るが、仕様が無い。自身のみの取  
引ではないのだ。先方が有り、此方が有る。そして、此方というの  
は自分の事ではないのだから。

(糞つたれめ！)

思ひはするが、言葉にはしない。正確に言えば、言葉には出来な  
い。そんな事をすれば、これから先、自分諸共所属する会社にまで  
影響が及ぶ事になるからだ。解つてはいるが、口惜しい。斬り捨て  
御免の時代なら、こんなオジサンは視界に入つた瞬間文字通り斬つ  
て捨てる。ややともすると、今でもそんな気分になる。

(ええい、ままよ！)

「・・・御機嫌も宜しい様ですので、僕は之で失礼致します。領  
収書は此方で切りますので後は心行くまでお楽しみ下さい」そう言  
つて僕は席を立つた。すると、背後から、

「また宜しく！」と、上機嫌にオジサンが言う。

僕は振り返り、「此方こそ」と、簡潔に応え、軽く会釈をし、踵  
を廻らした・・・。

駅前の広場。僕は其処に居た。さつきまで一緒だった不愉快なオジサンの記憶は、既に簡略に消去してしまった。そうでもしなければ遣って行かれない。

ところで何故こんな処に居るのかと言えば、何の事は無い。安田の事案を菊月に告げる為だ。

その後、彼、勿論菊月にだが、連絡を取り、また飲もうと、口上宜しく此処で待ち合わせているのだった。実際の用件等元より無理であるという事が解っているのだから、とにかくまた楽しもうというのが僕の本音であった。然し、其の反面、彼が、菊月が安田の言う通りに単簡な小説を書くというのなら、其れは其れで良いとも思っていた。菊月の文才からして、その辺のラノベ書き等及びも付かない程の面白い物を書くとは確信していたからだ。

ただ、其れには条件が有る事も解っていた。其れは、菊月真という人格の否定である。其れが何を意味するのは、残念ながらはつきりとは解らなかつた。何しろ、僕は物書きではないのだから。然し、どれ程心を痛めるだろうという想像は出来るつもりだ。

人が人格を放棄するのは、食うに困るか、或いは其の逆か。きつと、そんな処なのだと、僕は理解していた。其れとも、単なる思い付きか、心の迷いか。

いずれにせよ、心に何の迷いも無く、また、何の苦痛も無く人格を否定出来る者等、常識の有る者ならばまず居やしない。

彼は常識人であると共に、哲学者でもある。また、心理学者でもあり、教育学者でもある。実際彼は専攻科目の他に、先の件にある様な学問も研究していた。

「……マズツタかなあ」思わず、そんな事を呟くと、背後から声が掛けられた。声の主は間違い無く菊月だ。

僕が呆けていると、

「なんしたん？」と怪訝な顔で尋ねられ、其の御蔭で益々狼狽してしまつた。

「？」と、少年の様な綺麗な瞳で見詰められ、困惑する一方だが、このままでは埒があかない。

「い、いや、突然声を掛けられたんでちょっと驚いただけさ」  
そう言っ取り合えず取り繕うと、

「今夜もまたこないだみたく飲もう！」と、ワザとらしく大きな声で言い、さっきまでの消極的な態度を無理やり打ち消すと、未だ不審の眼差しを向ける彼の肩に手を掛け、

「さあ、行こう！」

僕はそう言つと、「おいおい」と、少々驚いた声を出して、目をぱちくりさせている菊月を半ば引き摺る様にして歩き出した・・・。

## 煩悶（後書き）

如何でしたでしょうか。営業を生業とする人達には少々申し訳無  
い話だったかもしれませんが、実際なので仕方有りませぬ。とり  
あえず、読んだ方はこんなマネは止めましょう。

## 会見（前書き）

今回は会見という事で、二人の関係性が覗えるかと思われています。離れていたのは特に嫌いあつての事ではありません。

## 会見

果たして辿り着いた僕のワンケーに二人は腰を落ち着け、まずは一献と、互いの酌で軽く一杯飲み干した。

「くう。たまんないね」と、急に呼び付けたにも関わらず、菊月は存外楽しそうな雰囲気を醸しつつ、早くも次の一杯に口を付けている。

(やれやれ)

心の中で呟き、一先ずは之で安心と、僕も次の一杯に掛かる。然し、次の瞬間、

「本日は御相伴に与り感謝するが、どんな案件を僕に仕掛ける積もりだい？」と、そう、菊月が落ち着き払った態度で、真っ直ぐに見詰めてきたものだから、僕は心臓を射抜かれた様な心持がした。

何しろ目が尋常でない。喜怒哀楽が完全に消失した様に、透き通り、感情が読み取れない。そのくせ、此方の心は完全に掌握されたかの様に感じるのだ。彼は時折こんな顔をする。こんな彼の一面にも僕は惹かれていたのだが、ずばり其れをやられると、寒々とした空気が辺りを包み込み、自分が何処に居るのかさえ怪しく思われてくる。空間の消失とでも言ったら良いだろうか。彼はそういう超絶した特技を持っている。

こうなつては最早隠し立ては出来ない。要件を告げずにいればいいのではないかと思うかもしれないが、其れは其れで、結局此処までバテてしまっている以上今後の付き合いの内にシコリを残すだけだ。つまり、もう話してしまうより他無いのだ。

僕は手に持っているグラスを地べた(勿論室内なのだから、莫塵くらいは敷いているが)に置き、「実はね」と、素直に白状し始めた……。

彼は特に怒る様子も無く、ただ黙然として聞いていた。そうして

終いまで話してしまつと、漸く僕は安堵する事が出来た。然し、彼の様子には多少の違和感を感じ得ずにはいられなかつた。ラノベ云々という話は、彼が最も嫌うものの一つの筈だ。其れを何という反応も見せず淡々と話させていた事が、どうにも僕には引つ掛かつた。其れで、

「どう思つ？どうせ遣らないだろう」そう、思い切つて訊いてみた。すると、

「君はどう思つんだい？」と、逆に問い返されてしまった。やはり、何かしら考えを廻らせている様だ。

僕は少し考えてから、

「僕からは何とも言えないな。然し、君はああいった類の物が嫌いなんだろう？僕が何か言えるのなら、無理はしない事、という事だけだよ」と、応えた。

素直に思つた事を伝えると、菊月は唐突に表情を緩め、口元に笑みを浮べた。

「君らしいな。傍観者たる立場に在つても人の事を心配出来るというのは凄い事だ」

何だかバカにされている様でもあつたが、彼に言われると、其れも悪くないと思えるから不思議だ。彼は強い、そう、猛毒を持ちながらも、其れを薬にも変えるという特技も備え持っている。なのに、世間や社会からは評価されない。一言で言えば“器用貧乏”というやつだろう。僕からすれば実に羨ましく、だからこそ、口惜しい。彼は断然相当の評価を受けて然るべきなのだ。そう考えると、安田の言っていた事も、まんざらでもないのかもしれないと思つ。然し、果たして其れで良いのだろうか。

と、話を受けた当人よりも悶えている僕を、彼が笑い出した。

「おいおい、何も君が煩悶する事でもないだろう？」

「あ、ああ、そうか」思わず僕も吹き出した。

「まあ、何だ。其の話は僕自身で処理する事にして、今日は飲むうじやないか。とは言つても、君の酒だが」そう言つて、彼は再び

グラスを空けて見せると、改めて僕に笑顔を向けた。

「そうだな。何だか疲れちまったよ。よし！飲もう、飲もう！」  
と、僕も負けずに続いた。

その後は特に考える事も無く、前回の様に昔を偲んで楽しく飲む事が出来た。ひよっとしたら、彼は僕に要らぬ心配をさせまいとして、安田の事案を引つ込めたのかもしれない。全く以って彼には敵わない。然し、そうだとすればこのまま楽しく過ごす事こそが彼の思いに沿うのだから、僕は何も考えず、ただ笑っていればいいのだ。

## 会見（後書き）

今回は中々に淡泊であったと思いますが、個人的にはこの辺りが最も好きなんです。如何お思いでしょうか。まあ、個人個人という事で。

## インディヴィジュアル(前書き)

この一節はかなりドン引きされそうな予感がします。読まれる方  
はお気を付け下さい。

## インディヴィジュアル

「然し、ラノベかあ」そう呟いたのは、僕だ。

愉快に飲み、愉快そうに帰って行つた彼の後姿は少しだけ淋しげに見えた。その表情にも、簡単には言い表せない何かが浮んでいた。

(彼は、安田の言う通りにするつもりなんだろうか)

そんな風に思わせる様な事を、暗にはあるが、彼は言っていたのだ。

『現代の文学は最早文学足り得ない。何故なら、命の尊さ、生の重さ、朝になつて目が覚めたとき、ああ、今日も生きている、というような儂い想いが籠められていないから。其れに何より、其の文壇を仕切っているのは醜悪に満ちた栄光の権化だからだ』と。全てに於いてその意味を理解した訳ではないが、然し、彼の言う事が籠つた物とそうで無い物とでは雲泥の差が有る事は確かであるのだから。実際、近代作家の殆どがメッセージ性の無い、単なる創作物としての物語を書いているのは彼でなくとも解る。仮に何らかのメッセージが籠められていたとして、其れは本当に作者が感じた処に因るものだろうか。単に取材を通して知り得た事を主題として其れを取り巻くべく何百ページもの、特に意味の無い副題、或いは想像、妄想を書き連ねているに過ぎないのではないのか。もしも、この仮説が通つたなら、やはり彼の言う通り、今認知されている現代の文学は文学ではないと言える。聡明な彼の事だ。その点に於いての考察は既に済んでいるに違いない。ならば、やはり……。

まただ。彼と居ると彼の思想が伝播する様だ。否定したい訳ではないが、之では彼に対して失礼だ。僕は僕であり、其の僕が僕の意見を言えなくなつてしまつたのでは彼にとって、僕は無用の物になる。僕は其れを望まないし、其れはきつと、彼にとつても同じ事だろう。

(之ではだめだ!)

前回の飲み会で感じた通り、彼は成長し、僕は停滞、或いは、減退している。之まで通り生きていくのには何の支障も無いが、こんな事では精神生活上の生を全うしているとはとても言えない。『ひとはパンのみにて生きるにあらず』とは、正に其の通りだ。物質的な生は生存であり、“生きる”という事象を肯定し得るに足りない精神の向上を目指してこそ、“人”として生きるという事であり、其の為には常に考え、感じ、想い、焦がれなければならない。正しく、生を。

歯車は、其の隣の歯車と連動し、力の必要も無く廻る。然し、其れは単に同調しているに過ぎない。つまり、実際の処廻ってなどいないのだ。数多在る社会の其れは、最早何処を起点として廻っているのか知る術は無い。よしんば其れが明らかとなったとして、個には既に己を望むべくも無い。すると、どうだろう。この世界は真なる姿を取り戻す事は出来ないのだろうか？否、其れは無い筈だ。何故なら、子供達にはまだ己の資質が失われていないからだ。では、どうすれば良いのか。之も考える必要は無い。歯車たる個が自身の力で廻れば良いのだ。

勝手に廻り出した其れに、少なくとも噛合っている箇所だけは同調する筈だから。菊月の言うプラスチックでない歯車ならば或いは其れが敵ったなら、同調した者達の傍に居る歯車も自然廻り出すというものだ。結果何が起るのかは、言わずもがな、社会の“壊善”だ。“戒善”と言っても良いかも知れない。そういう言い方をすると、勘違いをする人間が居るかもしれないが、そういう連中こそ、菊月の言う処の“豚”である。彼らが何を勘違いするのかと言えば、社会は悪であるのか？という事である。正しく其の通りだ。言わずとも気の付かぬ連中は既に社会に廻されているだけの取るに足らぬ生き物だ。食物連鎖にも加わらず、かといって、人である事さえ辞めてしまった、“ニンゲン”という生き物だ。人である資質を自ら放棄し、悪の迎合を善しとし、さらには、真実を詠う者を狂人と称

し、排除に掛かる。漠然とではあるが、其れが自身らの身に危機を齎す存在である事を察するからだ。他人を泣かせ、自らが笑うのは其れも仕様の無い事とし、其れすらをも自由とほざく。ならば、彼の、菊月の言う通りに責任を負う覚悟をしなければならぬ。然し、彼らニンゲンはそんな事には毛の先程も理解していない。無論過去の人々は其れを充分理解していたのだから、ニンゲンとは最初からそういう生き物ではなかった筈なのに、其れが今や、人をも喰つて知らぬ存ぜぬと又カす。最早彼らの居場所はこの世には無い。社会がどれ程彼らを繰つても目の見える人には其れは陳腐な人形劇にしか見えない事だろう。そんな下劣な道化芝居が延々と続くのか。或いは、耳の聞こえる人が嘘と見破り、口の利ける人がはつきりと言うのだろうか。『くさい、くさい』と。そうすれば或いは、引っくり返るだろうか。このどうしようもないくらいに、淀んだ空気を垂れ流し、常に霞を掛け、防音壁で覆い、マスクを被ったニンゲン達の狂った地下世界が。晴れやかな陽を受け、爽やかな風が吹き、何もかもが輝いて見え、麗しい命の鼓動に満ちた本当の世界に……。

## インディヴィジュアル（後書き）

ああ、読まれた方が引いているのが手に取る様です。然し、必要である以上書かねばならない事だったので（当時は）、仕様が有りませんね。また、宜しくして下さい。

## 死という天啓（前書き）

ここからが、この物の始まりと言えます。やっと本題に入るとい  
う形です。感情移入などしようもないとは思いますが、してしまっ  
た方には残酷に映るかもしれません。

## 死という天啓

菊月と飲んだ数日後、彼は、死んだ。

自殺などではない。安易な死を彼は選びはしない。其れはこの世界の何もかもに対する、究極の冒瀆であると知っているからだ。

彼の死の理由は、事故だ。暴走したトラックに撥ねられ、搬送された病院で息をひきとった。彼は常々、「死ぬにしても即死だけは嫌だ」と言っていた。ある意味では彼の願いは敵った訳だ。

彼は、其の数日の間に原稿を上げていた。其れは安田の勧めたラノベだった。然し、其処は彼の事。簡単に読めるという限定的な修正を加えただけの地味なラノベだった。変な魔法や、宇宙での戦いや、媚びた風では勿論ない。其の中にメッセージが籠められていた事は、わざわざ言うまでもない事だ。皆に解るように工夫し、砕けた形の比喻に寄って隠されてはいるが、読んでいけば解る様に細工されていた。

最後に彼は、彼のすべき事をしてこの世を去った。即ち、“種蒔き”だ。

彼の蒔いた種は、どれ程、そこいらの“子供達”に根付いただろうか。其の中で、どれだけの種が育っていく事だろうか。また、育った其れをどれだけの子供達が大切にしてくれるだろう。今の、つまり、現代に居座る連中の様に其れを無視して生きようとする者が居る中で、真なる正しさを求め、煩悶してくれる子供達がどれ程残るだろうか。きっと、殆どの子供達が途中で投げ出す事だろう。然し、たった一人でも彼の事を理解出来る者が居れば、其れは最早彼の勝利と言って良い。何故なら、残った其の一人はきっと彼と同じ事をするからだ。そうすれば、其の布教は終わりはない。たった一人でも良いのだ。そして、其の一人は既に居る。其れは、僕だ。

彼の死んだという報せを受けた僕は、耳を疑い、視界がぐらぐら

と激しく揺れ、吐き気を催すと、其のまま洗面所で崩れ落ちた。嘘だ、嘘だ。そう呟いて、狼狽する自分を何とか立ち上がらせようとしたが、無駄だった。こんな経験は初めてだった。何もする気にならない。体が動かないのならそれで良い。このまま時間が止まってしまえば良いと思った。或いは早送りにでもして、不具な体を腐らせてしまいたかった。視界に、美を思わせる物が何も無いのが良かった。このままならきつと、自分も死ぬ。希望さえ見えなければ、天恵さえ無ければ生きる事など無に等しい。ならば、洗面所という下らない場所で朽ちて行くのも悪くない。嗚呼、其れが適ったなら、どれ程幸いだろう。単に生き、単に死ぬ。醜悪極まりない生も逆転して、僅かにも、美しくもあろう。

だから、ただ、腐ってしまいたかった。彼の、菊月の言った腐臭漂う屍になってしまいたかった。

然し、其れで良いのか。彼に因って齎された啓示を打つ棄つてでも自らの思いを敵えるのは本当に許されるだろうか。彼の傍で、彼の抱く当然の疑問、煩悶に立ち会っておきながら、其れを理解出来る立場に在りながら、其れでも自身の感情に身を任せて良いものだろうか。

否！そんな筈がない。僕は彼の意志を理解している。彼の目指した場所を知っている。頑なに文学に拘り、かつ、現代の其れに絶望し、其れでも諦めなかった彼を知っている。形式上ではあるが、最後にラノベを書き、其れを以って自身の証明とし、其れを以って自身の種を蒔いた彼の意図を知っている。その僕がこのままいじめてしまつて良い筈がない。彼が書いたというラノベを、僕は草案の段階で既に目を通してしている。其の時受け取った彼の思想から成る種は既に僕の心に根付き、そして、芽を出している。陽の光は、いつでも燦々と降り注ぎ、僕の、僕だけの影を描いている。ならば、其れを糧として、この脆弱で、然し、活きる意志に満ちた芽を育てれば良い。どれ程時間がかかるかは解らない。菊月は学生時代、「君の顔には文芸の色が浮かんでいる」と言った。其れが本当なのか僕

には解らない。だが、才能なら誰にでも有るものだ。問題は資質。果たして其れが僕に有るのだろうか。いや、これは意味の無い疑問だ。彼の詩いた種を受け取り、そして、芽吹かせた事で、其れは容易に答えの出る問いだ。僕には資質が有る。そう、彼が言った通り、僕には文芸に携わる資格が有る。下らぬ夢に踊らされ、文壇に執着する者達など問題にならない程の。ならば、僕のすべき事は一つ。彼の、菊月の意志を継ぐ事。

其処にまで考えが至って初めて気が付いた。僕は何と不毛な時を過ごして来たのかと。之までの時を書き物に費やしていれば、菊月は一人にならずに済んだのだ。彼を孤独に追いやったのは、他の誰でもない、この僕だったのだ。思わず苦笑する。僕はバカだ。然し、其れも之まで。此処から先はもう社会の思い通りにはならない。させない。僕が気付いた以上、これ以上好きにはさせない。冷静に、狡猾に、残酷に、菊月の敵とした者達に思い知らせてやる。

## 死という天啓（後書き）

主要人物の死とは、文学に於いて必須と言っても過言では有りません。僕の持論です。文学とは世界の根本に迫らなくては意味がありません。ですので、人の生や死を重んじ、かつ、それを物の中で踊らせるのです。ここまで読まれた方がおいででしたなら、どうぞ最期までお付き合い下さいますよう、お願い申し上げます。

## 僕の文学論（前書き）

やっと終盤に掛かりました。心持唐突であるように、また、安易である様に思いますが、とりとめも無く書いて行くのは愚かであると考えていたのでこういった展開になりました。

## 僕の文学論

其の翌日、僕は辞表を携え、入社した。其れを突き付けられた営業部長は驚き、間誤まご付いていたが、然し、そんな事は僕には関係の無い事だ。ただ、辞める意思を提示すれば、後は何の用も無い。すぐさま踵を返すと、社を後にした。

実に幸いな事に、僕には浪費を好む性癖は無かったので蓄えは有った。暫くは何とかなる。そしてもう一つ。営業を生業としてきた事で培った人脈。それらを手繰れば、出版関係の人材には直ぐにでもアポが取れる。何しろ、僕は社の中でも優秀な部類に選別されていたから、結構な人物にも顔が利く。其れを利用しない手は無い。しかも、僕は菊月の親友で、かつ、安田の知り合いでもある。これらの利を得ている以上、交渉は簡単だ。営業という仕事上、散々遣ってきた事でもあるので、其れだけでも充分な程だ。即ち、得意分野なのだ。

然し、問題が無い訳ではない。確かに先述の通り、僕には大層な“味方”がいる。ただ、僕自身を売り込むにはまだ何もこの手には用意されていない。つてを使えば、内部に入り、“ウイルス”を仕込むなり、そういった連中を育てる事も出来るが、そんな事では対した意味は無い。一時的に混乱するだけか、或いは、其れ以前に収拾を付けられてしまうだろう。そうなれば、僕にはもう手が出せなくなってしまう。ならば、どうするのが良いのか。やはり、文壇に対するには文学しか無い。そうなのだ。僕には、僕自身、資質も才能も有ると信じたとして、其れを表現した物は何一つ手にしていない。つまり、物質的にあまりにも脆弱であるのだ。更に言えば、終幕への具体的なプランさえ持たない。・・・考えなければならぬ。如何にして、彼の者達を奈落へ導くかを。

物質的な弱さは、やはり着実な一手を以って解決すべきであろう。文学という物の何たるかを理解し、脳を鍛え、精神を育む。其の上

で、“ヨセ”まで運ぶのが良いだろう。彼の者達が放つ一手一手を、僕の文学に因つて失着へと誘い、其れすらも気付かせないのが理想だ。上手く出来るかどうかはこれからの事。悩むのは後でいい。嘸み付かれるくらいの事は想定範囲としなければ、相手を追い込む事など適う筈も無い。まあ、之位で良いだろう。では、いざ、尋常に勝負なり！

其れからというものの、僕は文学という枠組みの中で扱われてきた様々な“先生達”の本に目を通して行つた。無論、菊月の書いた物は必読だ。そうしている内、一つの事に気が付いた。文学というものは、単にロジックで書かれていた訳ではないという事だ。文章を書くにあたっては、基本的なルールが有るが、然し、其れのみを寄つていては、其れが如何に秀逸な物であつても、駄作に終わる。実際、そういつた物が多く見受けられる。ならば、何故、偉大な作家達は文豪と呼ばれたのか。其れは、巧くルールを破っているからである。文章を書くにあたって、其々（それぞれ）のルールを持ち、表現を持ち、しかも、其れを巧みに隠している。かと思えば露出狂の如く、其れを読み手の心に直接、其れも強制的と言える程、極端に曝け出す。あんまりと言えばあんまりだが、其れこそが作家にとつての特殊な特技だと解る。何故なら、現に大勢の読者が居るのだから。読んで貰うのではなく、読ませる技術である。なるほど、と思わず感心してしまうが、そんな事ではいけない。僕自身が其れを習得しなければならぬのだ。此れには大いに辟易するが、だからこそ、其れを得た時の僕は強くなるのである。少なくとも、彼は、菊月は其れを手にしていた。尤も、其れが災いして現代の文壇には受け入れられなかつたのだが。そういう意味では彼は愚直に過ぎたのかもしれない。僕はそう思わないが、彼の者達には其れが鼻に付いてならなかつたに違いない。なればやはり、菊月は策謀の果てに始末されたのだ。『ヤツに金を持たせてはならない』と。其の理由は言わずもがな、だ。

其れも頭に入れて、ともかくとして、僕は文学の一端を手にした。後は、更に読み、今度は実際に書いて行く事だ。何を書くのかは自由であるのだから、其れこそ何でも良い。日記を付ける様に、日々の出来事に自身の感性を織り込み、紡いでゆく。言の葉は存外、操り易く、然し、其れでいて、自由に従つてはくれない。まるで、子供を上手くあやせない新米パパの様だ。だからと言つて、癩癩かんしゃくを起こしては剣呑だ。言霊の宿らぬ、単簡なる文字の羅列になる怖れがある。真摯に向かい、かつ、手綱を握るのは此方である事を解らせなくてはならない。其れが出来たなら、定めし言葉は手に、心に、従うだろう。書くという事はまず其処から始めなければ話にならない。でなければ、人は此れ程までに言葉を洗練して行く事は無かつた筈だからである。情操に関しても同じ事が言える。此れは、判然としているので、説明の必要は無い、が、然し、敢えてするならば、情緒などでは言葉を制御する事など不可能であるという事実に基づくのである。

書くにあつては、一々考えるのは愚である。下手の考え休むに似たり。経験の浅い者が幾ら考えた処で、其れは奇を衒てらうものとして一般である。又は、穿うがつ事と一般である。思考と思想とは似ても似つかぬものである。一流と扱われる偽物は似非と呼ぶのが相応しい。其れは極簡単な作業である。人の好む処をのみ綴る事は正に其れである。言の葉は、幾千幾万の時を泳いでいる万物の管理人である。事象のみならず、霊を乗せ、今に至るのである。世界は其れに因り、人の魂を紡ぐ事で過ちを繰り返す事を拒絶する。紐解いた歴史が之より先に続くのは其の常だからである。言葉は人の、最大の発明であるが、其処に宿る言霊は、音霊として、人の発祥の以前であり、其れをも人の歴史と考えるのは愚劣の極み。臆断に因りて文壇に居座る者達は、其れに至るまで、人ならざる低脳のものである。パラノイアに悩まされる事無く、其れに罹る物である。彼の者達は、押し並べて同様なのである。菊月の神経衰弱は誉れである。万物の匂い、其れに駆られる焦燥。彼は一人、其れらを感じ、捉え、心に滲ませ

ていたのである。彼の者達よ、恥を知れ。全ては其処からなるぞ。

僕は考える。こうして考える。そして、そうか、と気付く。文学とは其の名の通り、文字を操り、自らの思想に乗せて、思うがままに躍らせる事である。漸う、辿り着いた。菊月の世界に。

此れで問題はほほ片付いた。後は、彼の者達への鉄槌をどういったものにするかである。然し、此れがとんと浮ばぬ。何としたものかと頭を働かせるが、やはり、思い浮ばぬ。実際的な方法など無い様に思う。ならば、どうしたものか、と、其処まで考え、又も漸う気が付いた。一人の出来る事など高が知れている。思う通り、拡声器を手にする事は出来ても、其れだけでは彼の者達を裁く事など出来はしないのである。では、どうすれば良いか。其れは……。

## 僕の文学論（後書き）

どうでしょうか？皆様には確固とした自身の文学論はありますでしょうか。それはただ考える事で辿り着くものでも教えられて身に付く物でもありません。心に留めた物達の営みを感じるよう努める事で漸く得られるものであると、僕は考えます。

## 僕の一手(前書き)

もうすぐで終わります。出来れば最後までお付き合い下さいませ。

## 僕の一手

「よう、安田の旦那」

やおら、掛けられた声に、安田は大いに驚いている様だ。鳩が豆鉄砲をくらはばこんな顔をするのだろう、という顔だ。しかも、彼からすれば、僕がわざわざ声を掛けてくるなどは露程にも思っていないから、対応に窮しているらしい。尤も、だからこそ、不意を突いたのだが。と、

「・・・背後から声を掛けるなよ。それに、突然すぎる」

安田は、漸くのこと、搾り出すようにそう応えた。

「悪かったな。然し、君の事だ。そろそろだと思っていたんだらう？」

「まあな。菊月の事は本当に残念に思う。せつかく評価された矢先にあのザマだ。全く運の無い男だ。で？何をこそこそ嗅ぎ回っているんだ？」

安田は案の定、僕をしている事を知っていた。そして、現れるタイミングまで計っていた。然し、其れは此方と同じ。そうでなければ、こんなつまらない男を引つ掛ける必要は無い。

「別に嗅ぎ回ってなんかいやしない。単に物書きを始めようと思っただけさ」

この科白には大層驚いた様子で、呆然と立ち尽くした後、ふと、或る事に気が付いた様に、口を開いた。

「まさか、僕を後見人にするつもりか？」

「なかなか察しが良いじゃないか。その通りだ」

「冗談にしては笑えないぞ」

「冗談を言うなら、わざわざ出版社の前で捕まえたりはしないさ」  
ふふん、と、鼻で笑って言ってやる。図太い小心者である彼は、器用に美しく青ざめる。彼の言う処の嗅ぎ回るという意味は其処に在る。要は、僕の遣っていた事が様々な方面への根回しである事を、

彼は察しているのだ。であれば、最早この提案が引つ込む事の無い事を悟つたのである。そこら辺は流石妄想を練り上げる名人。聡き愚か者である。今彼は、この先に待っている自分の運命を数学の公式にでも当てはめて考えている事だろう。然し、

（残念。君に未来は無いんだよ）と、心の中でほくそ笑む。僕に目を付けられたが最後、逃げ出す方向に有るのは黄泉の国への門だけだ。其れを潜るのが嫌だというなら、

「従うのが賢明だ」と、ダメを押しやってやった。

「・・・そうみたいだ。だが、タダでというのはゴメンだ」と、安田は食い下がる。

「まあ、そうだろうな。そうだな、成功の暁には幾らか回してやるよ」

（責任も含めてな）とは、当然口には出さない。

「金を出せなんて言わない。広告としての名売りだ」

「良いさ、幾らでも宣伝すれば良い。ただし、成功すればの話だ」

「成功させるさ。編集部がな」

「ふん、まあ良いさ。」

「それにしても、どんな小説なんだ？君の事だ。ラノベではないんだろう」

「君を後ろ盾にすると云ってるんだ。ライトノベルに決まってるだろう」

「へえ、そりゃ驚きだ。菊月の意志を継ぐもんだとばかり思ってた」

「彼と親しかったからさ。文学など下らない。殆どの賞に同じ審査員が就いているんだ。その事実が既に文学の終わりを告げてる」

「そんなもんなのか。僕は一向知らなかった」

「そうだろうな。君のすべき事は読者を歓喜させる事だろうからな」

「その通りだ。毎回骨の折れる作業ばかりだ。一々解るように書いてやらなくちゃならない。念の為に訊いておくが、その覚悟はあ

るんだらうな」

「勿論。君の言う処の嗅ぎ回る内に承知しているさ」

「なら、いいんだ」

「さて、余談は之くらいで終わりにしよう」

「ああ。僕も用があつてここに来たんだからな」

そう言つてビルに入つて行く安田の背中が、さつきより幾分小さく見えた。流石に疲れたのだらう。元々、彼は人と交わる事を苦手にしているからだ。本人は否定しているが、作家の道を歩くのはそれが為と言つても間違いないだらう。

「おい、早く来いよ。けしかけたのは君の方だらう」と、先を行く安田が文句を言う。

「ああ、解つてる」

御座なりに返事をした僕は、安田の背を見ながら附いて行つた。

出版社はビルの三階に陣取っている。いる、という表現は、僕が以前此処を訪れた事が有るからだ。安田も其れは解っているらしく、彼は彼ですぐさま自分の担当を務めているのであろうオツサンの処へ行つた。

僕は僕で、編集部の責任者に改めて自己紹介をし、用意して来た原稿を手渡した。彼には、以前来た時に散々散財してやったので、わざわざ別室を用意してまで僕の書いた物に目を通してくれた。そして、

「ある程度こちらの都合の良いように改変させてもらうが、よろしいか？」と、簡潔に応えた。無論、応えたのは原稿に対してだ。

「勿論です。其方の要望に沿うようにします」そう応えた僕は内心ほくそ笑んだ。

（ざまあみろ。僕の書くライトノベルの“ライト”は正しいって意味だ）

そんな事にはごうも気の付かぬ編集隊長は、如何にも満足であるといった笑みを浮かべた。どうやら、気に入ったらしい。と、ドアをノックする音が響き、返事を待たずに安田が入ってきた。どうにも無遠慮なやつだ。こんなだから、菊月にラノベを書けなどと容易く言い放てたのだろう。

「部長、どうぞ宜しくしてやって下さい」などと、此方でのやりとりなど知ろうともせず、唐突に口走って得意げに僕を見下ろした。其の視線があまりにも臭いものだから、僕は肩を竦めた。すると、代わりに隊長が経緯を説明してくれた。

「なんだ。僕をダシにするとっておきながら、話は通ってたんじゃないか」と、何故か呆れるような仕草を見せた。対して、僕は、「当たり前だ。何の勝算も無しに敵地に赴く武士が居るか」と、鼻で笑う様にして言っでやると、

「いるさ、ミブロがそうだ」と、まるで勝ち誇るかの様にして胸を反らす。

「玉碎覚悟なら、もっとデカイモノに立ち向かうさ」

「失念したか？編集部長の前だぞ。失言だ」

「いやいや、これ位の覇気がある方がこちらとしてはありがたいもんさ」と、隊長が割って入る。

「まあ、そういう事でしたら」

隊長の言葉に、安田はまるでチワワの様に小さくなった。其の様からも解る様に、安田はアホの王様だ。権力に媚びる事に長けた愚者である。権力に対しては媚びるのではなく、巧く利用するのが社会人の常識だ。彼は其れを知らない。然し、何れにせよ、其れに頼る事は形を問わず同義である。彼が愚者ならば、僕はBeauty foolだ。ナルシストではないが、其れだけは断言出来る。何しる此れは、ラノベを書くのは、終幕への最初の一步であるからである。

## 僕の一手（後書き）

今回は会話文が多く見苦しい点も有ったかと思えます。ですが、これもひとつの手法ですので、どうかお許し願いたく思います。

## 議論（前書き）

完全に会話文で構成されています。苦手な方は斜め読みして下さい。

「じゃあ、細かい話は後日という事で」と隊長は嬉しそうに僕に言う。何しろ、彼は僕を大成させようと躍起になっているからだ。其の理由は言わずもがな。僕としても金に執着する気は無いので、其の野望に乗ってやる気は大いに有る。安田はヨイシヨに終始していたが、毎度の事なのだろう。編集部の皆は特に目を引くリアクションは見せなかった。

「あまり、しつこいと嫌われるぜ」念のためそう言ってやると、「ああでもしないと、新人に目が行っちまうんだよ」

そう言う安田は、まるでノルマもろくにこなせない営業的リーマンにそっくりだった。

「まあ、良いじゃないか。結局君の手を煩わす事も無かったんだからな」

「ちつとも良くない！君は僕に利を約束したじゃないか。それが何だあの遣り取りは。僕がいる必要が全く無いじゃないか！」

「馬鹿な。約束は成功報酬としてだ。それに“オビ”には君の名を使うように言っている。出来上がりを見たら良いだろう。君の推薦という事で話を進めておいたんだぞ」

「は？ そうなのか？ 早く言ってくれよ。たちが悪いぜ」

「大分菊月に似てきたろう？ 君を脅かそうと必死に努力したんだぜ」

「冗談は止してくれ。これから幾らかの付き合いをしなければならぬんだ。君は君のままでもいいから」

「僕は僕のまま・・・か。其れが出来たならどれ程楽か知れやしない」

「出来ない理由なんかないだろう？」

「有るから苦しんでるんだ」

この応えには彼も俄かに疑問を覚えたようで、暫く考え込んでか

ら、思い切った様に、思うままに切り出した。

「君は菊月ではないんだ。そこまで彼の思想にこだわる必要は無い筈だ」

「確かに、君の言う通りだ。然しな、育ってしまったんだ。彼の残した種がな」

「それがバカバカしいって言ってるんだ。放っておけばいいだろう」

「其れも一理有るな。だが、知っているか？魏の曹操は五十年、いや、百年のスパンで計画を練っていたそうだ。この意味が君に解るか？」

「解らないな。それとこれとどういう関係があるんだ？」

「解らないならいい。解る必要も無い。然しな、一つだけ君に忠告しておく。この世界の主役は子供達だ。そして、其の子供達はラノベを読む。勿論文学を追求しようとする者も居るだろう。然し殆どの子供達は漫画や、小説ならやはりラノベを読むんだ。其の時、君はどう思う？覚悟は有るか？責任を負う覚悟が。其れを書くのは大人達だ。稀に子供も居るが、大抵は大人達だ。情緒にまでしか発展を遂げない者が書く文章を、プロが書いたという理由で信じてしまふ子供達が将来どうなるか、君には想像が出来るか？」

「それに関しては以前も聞いたよ。責任は出版社にある。僕等はそんな事を気にする必要は無いんだ。あつたとして、どう責任を取るって言うんだ。やってしまったものはどうしようもない。その後には子供達に任せるしかないだろう？」

「結局其処に帰着する訳か。日和見主義だな。彼に嫌われる訳だ」

「別に好かれようなんて思ってなかったさ。ただ、彼の才能を勿体無いと思っただけだ」

「其れは彼の為か？ 其れとも、君の為か？ 後者だろう。だから、彼は君を嫌っていたんだ。君は、僕は僕のままできると言ったが、其れは無理だ。人は成長するものだ。僕は幼いが、君程じゃあない。気付いちまったんだよ。有形の幸福は無形の幸福には敵わな

いつてな」

「何の事だ？ 全く解らないが・・・」

「そりゃあ、そうだろうな。金に困る機会が無かった君には幾ら考えた処で解る筈も無い」

「話が逸れていないか？ 僕は君と喧嘩をする気は無いぞ」

「此れくらいで丁度良いんだ。議論と呼べるくらいでなくては。ちなみに逸れてなんかいやしない。本題に入ったばかりだ。世界の主人公が子供達だって事はさっき言ったな。其れは確信を持って言える事だ。何しろ、年寄りも老い先短い。逆に子供達は之からが本番だ。そんな彼らに嘘っぱちを教える小説を書いて読ませるのはどういう料簡だ、と、そういう訳だ」

「そんな事は作家の考える事じゃない。さっきも言ったろう。責任は出版社にあると」

「欺瞞きまんだな、其れは。GOサインを出すのが出版社の仕事だ。物を書くのは書き手だろう。元を正せば其処にこそ罪は在る。当然人の手に因るんだから、其れは書き手の責任だ。其れを無視するのなら作家としては三流だ。アマチュアでも其れくらいは認識してるぜ？」

「・・・まあ、正直なところ解らなくはない。しかし、それでも出版を許す出版社にこそ責任を負わせるのが契約上の正しさだとは思わないか？」

「確かに一理、有るには有る。が、僕の言っている事は其れ以前の問題なんだよ。何を伝えるべきか。自分が生きた内で何が大切なのかを論じるのが作家の役目ってもんだろう。詰りだ。大学に通って、教授に付いて、様々な事を教わって、やっとこさ解る様になって来た頃に、実は間違いでしたなんて言われてみるよ。誰だってフザケンなっと思っただろう？ 其れと同じ事だ。ましてや、其れが幾年の年月の後だったらどうなんだ？ 取り返しが付かない。そんな時誰に八つ当たりすれば良いんだ」

「八つ当たりならすべきじゃないだろう」

「其れは比喩だ。君も作家なら其れくらい気付く筈なんだがなあ。」

「・・・君も本当にたちが悪いな。はっきり言えば良いだろう」

「そりゃあ、そうだが。然しだ。最初から答えを与えて育てた子供はどうなるのかな？其の先も生きていけると思つか？要は君は簡単に書き過ぎなんだ。考える自由を奪っている。其れこそが小説の本質ではないのか？ 嬉々として小説を貪る子供なんて気味が悪いぜ」

「仕方ないだろ。それがラノベってモンだ。難解な問題集なら、普段からやつてるだろ？ 子供達には宿題がつき物なんだ。たまには娯楽を与えなけりゃグレちまう」

「そうかね。結局はそういうモンか、ラノベってのは。菊月が聞いたら、僕の所蔵の焼酎が一辺に無くなりそうだ」

「そうさ。そういうモンさ」

「・・・」  
「・・・」  
「・・・」

結局其の日は、議論とも呼べない様な会話で安田と別れた。然し、目的は果たした。

僕は其の一ヶ月後、ラノベ作家としてデビューを果たした。

## 議論（後書き）

こんな会話文でも、読んで感じる事が無いなんて事は有りません。ですので、これは確かにこの物の一部です。どちらの味方かは解りませんが、然し、双方に理が有り、また、双方に偏見が有る。これが物書きの本来ではないかと僕は考えます。

枯れる花 育つ種（前書き）

最終話です。やっとここまで来ました、という方には感謝します。  
では、さようぞ。

## 枯れる花 育つ種

「しかし、あれからもう三年も経つのかあ」

呼びもしないのにやって来た安田が、ふとそんな事を口にした。

「ああ。三年だ。」

「君は随分出世したね」

「毎日を努力に費やせばこの位どうにでもなるだろう」

「耳が痛いね」

そう言つて安田は、僕の、いや、俺の振舞つた焼酎を口に付ける。

「今回はどの位必要なんだ？」

「そうだな。二十位何とかして貰えないか？」

「二十だな。解つた。明日にでも振り込もう」

「済まない。助かるよ」

簡単な礼を済ませると、安田は手に持ったグラスの中身を一気に飲み干した。

あれから、俺が作家としてデビューを果たして三年。安田と俺の立場は一転した。

俺は順調に執筆活動に専念し、其の御蔭で安田は駆逐された。誤解して貰つては困るので、付け加えるが、安田の排斥された理由は、単に俺の陰に隠れてしまった、という訳ではない。台頭してくる新人に押し出された格好だ。逆に俺は、徐々に評価を高くして行き、昨年からは新人賞の審査員も務めるようになった。其の頃にはもう、安田の居場所は無くなっていた。まあ、当然と言えば当然だ。誰でも書けるような妄想小説ばかり書いていたのでは、其の身が果てるのを待つと同義だ。本人が気付いていなかったせいで、其れは彼の想像よりも早くやって来た。俺と同じく浪費癖の無い彼であつても、職を失つてしまえば諸々の事情から生活水準が低くなるのは自然の摂理である。そうして、今日のように俺に頼りにやって来るよ

うになつたのである。

「いい加減、何とかしないとなあ」

一人ごちる様に安田は言う。

「何とかとは、何だ」

「執筆だよ。これでも君が作家になつた頃は売れっ子だったんだ。僕にもプライドがあるからね。そこらを駆けずりまわるさ」

「そんな事が出来るのはプライドが無いからじゃないのか？」

「バカを言うな。生活の為だ。別に過去の栄光に捉われている訳じゃないさ」

「そうか。まあ、健闘を祈るよ」

「ああ。祈ってくれ。そうでないと、君に借りている借金が返せない」

「気にするな。人に金を貸す時は返つて来ない事を前提にしているからな」

「それじゃあ困るんだよ。返す気概がなけりゃあ生きていく活力が湧いて来ない」

「じゃあ、そう思つて頑張るんだな」

「ああ。頑張るよ」

そう言つと、安田は腰を上げた。金の話が済めばいつでもそそくさと帰つて行くのが彼の良い所だ。話していつまらない相手に何時までも居座られては気が滅入る。

「じゃあ、済まないが宜しく頼む」

「ああ」

安田を玄関まで送り、溜め息を吐く。やっと、楽になれる。

先述の通り、執筆で忙しい中、新人の審査まで引き受けるのは大層骨が折れる。然し、其れも俺の目的であつたのだから、文句は言えない。其れ程の大役が回つて来るまでの間、必死だつた事もあり、大して苦にはしていなかつたが、今この立場で執筆までこなすのは並大抵ではない。が、其れも之までと考えると、やはり開放感で心は躍る。

俺はこの後、新たに書き上げた、ラノベではない作品を最後に引退をする。勿論、其れは俺の心に仕舞い込んでいるから、其の事は誰も知らない。俺の目的は、大成を成す事では無い。この三年、ラノベに文学、様々な小説を書いて来たのは、評価を上げ、機構の中樞に潜り込む為だ。つまり、文壇の楔くわくとなる事が目的なのである。其れも今適ったのだから、之以上書き続ける意味は無い。後は、“俺と菊月の子供達”に任せれば良い。其の為に俺は楔となったのだ。ただし、其れは単なる楔ではない。ガラス製の脆いものだ。いずれ、子供達が育つ頃には、彼らの重みで簡単に砕け散るだろう。然し、そうならない可能性も有る。無論、このままでは、という話だ。其処で必要な手を之から講じなければならぬ。

「明日、振り込むんだつたな」

はつきり言つて面倒だ。だが、約束を違える訳にも行くまい。今の俺が在るのは、安田の存在が在ったからとも言える。一応にでも役に立った男を、裏切る訳にはいかない。然し、之から遣らなければならぬ事を考えると、どうにも手順が狂いそうだ。

「仕様が無い」

電話を手に取り、出版社に連絡を付けた。明日、俺の手にする筈の金の一部を安田の口座に振り込むように、と。一応ではあるが、安田と出版社とは、まだ繋がりが有る。御蔭で俺の頼みはすんなり受け入れられた。

此れで、用は全て済んだ。全ては此れで終わった……。

狼は生きる！ 豚は死ぬ！

愚劣なる大衆には、冷たい雨を！ 烈しい風を！

日和見主義、御都合主義、オポチュニズムには破滅を！

単簡なる情緒、感情には、“平手の祝福”を！

免罪符、羊を得よう者には、同等の罰を！

神を頼り、仏を崇め、自身の責任から逃れよう者には、生き地獄たる社会に於いての永年なる生を！

影響力の功罪を問わぬ者には、因果応報を！

言葉の安売りをする愚鈍なる“子供達”には、苛烈なる結末を！

迎合を善しとする臆人には、幸いなる不幸を！

リアリストを称する者には、醒めぬ夢を！

遣りもせぬ、止めもせぬ者達には、残酷極まる現状の露呈を！

今一度、繰り返そう。今度は俺の意志として。

菊月の残した遺産は俺の中で芽生え、成長し、そして、咲き誇った。其れを、シーザー程度の暗号として流布した。咲き誇った花から生まれた種は蒔き終わった。後は、ガラスの楔が砕けやすいようヒビを入れるだけだ。現代の文壇が悲鳴を上げるのをこの耳で聴かれないのは残念だが、贅沢は言っていられない。目的は遂行したからには遂げなければならない。其の時はもう既に来ている。

嗚呼、願わくは、この先に未来を見据え、夢見る子供達が幸いなる事を。

そろそろ、眠くなって来た。安田の訪問のせいで、多少時間を取られたが、まあ、其れは気にすべくも無い。いや、其の御蔭で良い事を思い付いた。このまま眠りに就く前に、一つ、詩を残そう。

僕が苗床なら、キミは人柱かな？

個は既に用済みで、己なんてモノは既に無い

「私は苗床で、君は人柱」

いつかキミが言ってた通りさ

個は既に用済みで、己なんてモノはハナから無い

“セカイ”はバカみたいに一様だから ひどく虚しくて、ひどく  
哀しい

それでも“セカイ”は“マウル”から 悔しいけれど、足は止められない

どれ程僕等が嘆いても、“セカイ”様から見たりなば  
スベテヨハコトモナシ の一言で終わるのさ

キミは今どうしてるかな？笑ってるかい？

キミならどう思うかな？ワラツチャウ、かな？

僕は今にも狂いそうさ 前頭葉が限界だ

僕はもう狂ってるって？そうかい、fools

だったら僕は 噛み付いても良いんだろう？

全部吐き出して 叫んでも良いんだろう？

嘘を脱いで 走り出しても良いんだろう？

せいぜい御覚悟為さいませ 墜ちた“君達”

切符は一枚限りで御座います

逝きにて終いに御座います

魑魅魍魎闊歩する 楽しく愉快な冥府の御国

次の世界はもう御座いません

生きた心地の無いこの“セカイ”

どこがどう違うのか説明出来たなら

生還出来るかもね ケダモノとして

解かるかい？もう手遅れなのさ

人を呪わば穴二つ 最後に笑うのは唯一人

風になって消えた 麗しのキミだけなのさ

Bye-bye.Thank you,My girl.

Hello,My fancyLife,tripOneLife.

いかな。此れではバッドエンドだ。此れでは俗すぎる。何か他に良いモノは無いか。

そつだ。一つ、今の社会に助言を残そう。

世に希望無く、故に、生くる術無し

どうだい？ ぴったりだろう。この言葉さえ反芻はんすうすれば、何時でも、何処でもハッピーに違いない。嗚呼、俺の人生よ。菊月よ。此れなら満足だろう？ 此れなら、幸せだろう？

子供達よ、笑ってくれ。欲に塗れず、天を仰ぎ、諸手を掲げ、空手に幸せを掴んでくれ。

さら・・・ば。我が、愛し・・・の・・・

終

## 枯れる花 育つ種（後書き）

これで最後です。以前書いた物でしたので、いつでも終わらせる事は出来たんですが、つい面倒で今日まで遣らずにしまいました。ですが、やっと終わりです。何か感じるものは有ったでしょうか？ そうであったなら幸いです。ここまで読んで下さった方が居られましたなら心よりのお礼を申し上げます。読了有難う御座いました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7087i/>

---

アンチインスタンティズム

2011年9月8日00時21分発行